

カツベン・ピープル 企画書

●イントロダクション

—— 昭和初期。京都。無口な活動弁士の淡い恋。

トーキー映画（映像と音声同期した映画）が昭和初期に日本にやってくる前、日本で普及していた映画とは音声が入っていないサイレント映画（無声映画）だった。欧米ではサイレント映画は台詞や状況解説の字幕と伴奏音楽によって上映されていたが、日本では伝統的に歌舞伎の浄瑠璃のように、上映する際に口頭で状況説明や人物の心情を表現する事が求められた。

そこで、生まれた職業が「活動弁士」
日本独特の文化が生み出した、日本にしかない「話芸」

明治から現在に至るまで、様々な活動弁士たちがいた。中には、敢えて語らないことで間を活かした活動弁士たちもいた。そして、この映画の主人公はとにかく喋って喋って喋りまくる活動弁士。

—— 彼の語りが映画を娯楽に仕上げるその「芸」を映しとりたい。

●ストーリー

昭和12年。トーキー映画の波が押し寄せつつある京都。活動弁士の需要が危ぶまれ始めた時代。もはやお客さんに必要とされない職業になりつつある活動弁士。

映画館で無声映画の上映が行われている。映画館の舞台上にいる活動弁士・山野慶二はとにかく喋りまくる。舞台上で山野は輝いていた。しかし、山野の饒舌な語りは映画にとって不必要な物になりつつあった。お客さんは少ない。しかし、客席には若い女性・井上の姿があった。山野は井上に淡い恋心を抱きつつも一度も喋った事はない。山野は普段は無口で冴えないぼんくら男だった。井上も奥手で無口だった。

知り合いの活動弁士達は皆、漫談家や司会者、紙芝居師などに転身していった。山野の師匠もこれからの時代、現実的には活動弁士では食べていけないと言って漫談家になるべく京都を去り浅草へと向かった。器用に生きていける人間に嫉妬しつつも、山野が活動弁士を辞めなかったのは映画への愛と、いつも山野が舞台に立つ時には必ず見に来てくれる井上への恋心があったからだった。

山野が専属活動弁士として働いていた映画館から遂に解雇の知らせを聞かされる。山野活動弁士としての最後の舞台。舞台に立つその日は、大雨で鴨川が氾濫する危険があった。当然のように客席には誰にもいなかった。映画が始まる。山野は誰もいない劇場で一人、語る。映画がクライマックスシーンにさしかかった時、雨でずぶぬれになった井上が劇場に現れる。山野の語りは映画から大きく飛躍しつつも、呼応し、山野の言葉が走り始める。井上への愛の言葉を。

●作品概要

題名：「カツベン・ピープル」

監督：堀江貴大

上映時間：20～25分